

(第786回)

西郷小6年生がミズバショウの保全活動を行いました (2023年10月4日)

鶴岡市の西郷小学校6年生19名が、西郷地区に自生しているミズバショウから採取した種から発芽させた苗をプランターへ移植しました。

この活動は、平成21年度からの西郷北部地区ほ場整備事業をきっかけに、平野部に自生する「ミズバショウ」をシンボルとした環境保全活動として始まりました。

毎年西郷小学校6年生と西郷土地改良区が、7月にポットへの種まき、9月にプランターへの移植を行っています。

今年は猛暑の影響で発芽が良くなかったため、西郷土地改良区の職員がポットから発芽した種を取り出し、バケツの水に浮かべて苗を育てました。毎朝バケツの水を交換し、夕方には冷蔵庫で冷やした水を入れる等の温度管理も行いました。

プランターに移植したミズバショウは西郷土地改良区で6~7年育てた後、現在ミズバショウが自生している区域の外側に移植しています。

ミズバショウの移植の取組みをとおして、環境保全について理解を深めていただきたいと思います。

【取材：庄内PJA 八鍬】



[当日の作業の様子 (作業の説明)]



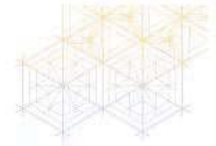
[当日の作業の様子 (移植作業)]



[当日の作業の様子 (プランター移植後)]



[ミズバショウの自生地 (春)]



めだかの里米 ～おいしく実ったよ～ (2023年10月11日)

今年5月に田植えを行った庄内町家根合地区の「めだかの里米水田」で、余目第一小学校4年生30名が稲刈り体験学習を実施しました。

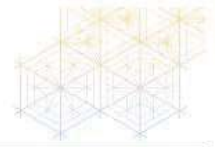
作業前に、NPO家根合生態系活動センター大井庄一理事長並びに庄内総合支庁農村計画課職員から説明を受け、いざ稲刈り開始。

前日からの雨で少し足元がぬかるんでいましたが、服が汚れることも気にせず1時間余りで稲刈りを終わりました。

「稲刈りは初めてで楽しかった」「稲刈りは簡単だと思っていたけど、カマで刈るのが難しかった」「稲が細いものや太いものがあった大変だった」等の感想があり、楽しく充実した時間を過ごしました。

【取材：庄内総合支庁農村計画課 高橋】





鶴岡市の越沢自治会が内閣総理大臣賞を受賞！(2023年10月25日)



令和5年度農林水産祭むらづくり部門で、越沢（こえさわ）自治会が**内閣総理大臣賞**を受賞しました。

越沢地区では少子高齢化や転出による人口減少が進んでいることから、将来を見据えた地域づくりが必要と感じた住民らの発案で「越沢活性化ビジョン」を策定し、活気あふれる集落を目指した取組みを始めました。

むらづくりの核となる「越沢三角そば」は、自家採種で代々受け継がれてきた品種で、平成28年に在来作物に認定されました。

地域外の人に来訪して味わってほしいとの思いから、打ち立てのそばは自治会運営の「そば処 まやのやかた」で提供されています。

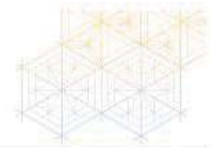
また、収穫されたそばを自治会が固定価格で全量買い取ることで、生産者も安定した収入を得られる仕組みが構築されています。

毎年秋に開催される越沢新そばまつりでは、住民のほか集落に関わる大学生などが運営に携わり、世代を超えた地区内外の交流が生まれています。

豊かな自然を最大限活用した活気あふれるむらづくりの事例として高く評価され、今回の受賞となりました。

【取材：庄内PJA 池田】





月山高原の雄大な自然の中で みんなで楽しく収穫祭イベント (2023年11月1日)



鶴岡市羽黒町の月山高原畑団地で、月山ろく環境保全会(運営委員会代表 鈴木昭夫さん)が収穫祭イベントを行いました。

農産物を自分の手で育てることで、月山高原の畑団地に対する関心と愛着心を高めてもらおうと平成27年から実施しています。

今年は、鶴岡市や酒田市の子も連れ家族など約70人が参加して、6月に自分たちが苗を植えたサツマイモの収穫にチャレンジしました。

西高東低の気圧配置で強い雨が降りましたが、参加者は、強大で大きく絡み合ったサツマイモのつるを力いっぱい引っ張り、さまざまな形に成長したサツマイモを次々に引き抜きました。

大きなサツマイモを掘り出すと「重くてびっくり」「楽しい」「来年も来ます」と喜んでいました。

【取材：庄内PJA 北川】





秀峰鳥海山の麓で「ひまわりの植栽」の取り組み (2023年11月8日)

酒田市八幡地域の日向(にっこう)保全会(会長 土井豊さん)は、秀峰鳥海山の麓に広がる集落において毎年、地区の景観形成活動に取り組んでいます。

今年は、日向保全会の入り口の福山集落から終点の升田集落まで、延長11キロメートルの県道沿線で「ひまわりの植栽」を行いました。

升田集落では15アールの農地にひまわりをとともきれいに咲かせて、玉簾(たますだれ)の滝を訪れたたくさんの人を感動させました。

この活動は、高齢化社会の中で農地を守ることはもとより、地区の人と人とのつながりを守り続けていくことが大きな目的です。

地域農業の持続や農業資源をみんなで守り続けていくことが、この地域の持続的な発展につながっていきます。

【取材：庄内PJA 北川】



[一画像をクリックして拡大 \(PDF: 1,606KB\)](#)



棚田の新米をお楽しみください！(2023年12月1日)



大網の棚田



暮坪の棚田

山形県では、棚田地域の新たな魅力発掘・発信と価値創出の一環として、棚田地域振興に取り組んでいます。

今回は棚田米の消費拡大とおいしさをPRするため、新米の味をダイレクトに味わえる「おにぎりランチセット」を1日40食限定で提供します。

12月に開催される第2弾では、鶴岡市の「大網の棚田」と「暮坪の棚田」の新米を味わうことができます。

ぜひご賞味ください。

- 開催期間：2023年12月11日（月曜日）から12月15日（金曜日）まで
- 時間：午前11時から午後2時まで
- 場所：県庁1階の県庁食堂（山形市松波2丁目8番1号）



【取材：庄内PJA 池田】



「将来の鹿島農業を考える会(第1回)」を開催しました！(2023年12月6日)

酒田市鹿島地区で「将来も鹿島で農業を継続するにはどうすればいいか」を考える会が行われました。

この会は、将来の農業に不安を抱いた農業者が、地域住民を巻き込んだワークショップ形式での話し合いを行い、農業の継続に向けた計画づくりを目的に開催されたものです。

今回は農業の現状に対する気づきと共有を行い、「住民同士のつながり」「農業法人があること」が強みとして挙げられたほか、「農地の条件が悪く作業しづらい」「人口減少による農業や地区の存続」が不安なこととして挙げられました。

今後、強みを維持するにはどうするか、不安なことを解消するにはどうするかについて提案を出し合い、地域農業を継続するための話し合いを行っていく予定です。

【取材：庄内PJA すがの】





下山添のきゅうり団地のいま (2023年12月13日)



鶴岡市櫛引の下山添地区では、元々水田だった1.3ヘクタールの農地をきゅうり団地にするため、令和2年度に暗渠排水工事やビニールハウスの造成工事が行われました。

3年目となった現在、田んぼに囲まれた18棟のビニールハウスでは、新規就農者を含め18名の生産者が、灌水と施肥を自動的に施用するシステムを使って高品質なきゅうりを栽培しており、庄内唯一のきゅうり団地となっています。

今年は夏場の高温もあり、きゅうりの生産量は例年より減少したとのことですが、11月中旬まで加温しながら栽培され、関東方面や市内の学校給食で提供されています。

生産者が協力し合える農地の整備によって、農業経営の安定と食の安定供給につながっています。

【取材：庄内PJA すがの】



[一クリックして拡大 \(PNG : 5,296KB\)](#)



農村地域づくり活動を支える 若手・女性等事務担当者の育成 4 (2023年12月20日)

酒田市吉田地域保全会（代表 菅原明廣さん）は、多面的機能支払交付金を利用し、水路や農道の保全活動、集落の植栽活動を行っています。

保全会は活動を開始して8年目です。役員世代交代が必要ですので、代表は若手農家の渡部仁利（まさとし、写真右）さんと遠田貴志（たかし、写真左）さんに白羽の矢を立て、県多面的機能支払推進協議会が開催する「若手・女性等事務担当者の育成研修会」に参加するよう声をかけました。

渡部さんは39歳、水稻14ヘクタールを栽培し、サラリーマン時代に総務担当の経験があります。遠田さんも39歳、水稻8.5ヘクタールを栽培し、パソコンの使用に抵抗感がありません。

二人は研修会に参加して、交付金制度について理解を深めました。

すでに同級生の池田義隆（よししたか）さんが保全会の書記を担当しており、幼なじみの三人が保全会の事務局を担っていきます。

三人は、「保全会の活動は農家と非農家の目線で対応していきたい」と考えています。

【取材：庄内PJA 北川】





「将来の鹿島農業を考える会(第2回)」を開催しました！(2024年1月10日)

酒田市鹿島地区で「将来も鹿島で農業を継続するにはどうすればいいか」を考える第2回ワークショップが行われました。

今回は、前回の話し合いで出された地区農業の「強み」「弱み」「資源」「不安」の気づきに対して、「維持するには」「改善するには」「活かすには」「解消するには」どうしたらよいかを提案しました。

「人のつながりや法人を維持するため、法人を会社組織化する」「ほ場条件を改善するため区画を拡大する」「シンボルや自然を活かして鹿島ブランド米を作る」「後継者の不安を解消するため移住者を呼び込む」といった提案がありました。

参加者からは「将来に向けた話し合いが活発にできて良かった」「一人一人がいかに自分の住んでいるところを良くしていくか話し合うことが大切」といった声が聞かれました。

今後、これらの提案内容を営農計画につなげる話し合いをしていく予定です。

【取材：庄内PJA すがの】





ため池の生きもの調査～環境との調和に配慮した取組み～(2024年1月17日)

土地改良法に基づき実施する農業農村整備事業では、ほ場整備などの工事に際し「環境との調和に配慮すること」が法律で規定されています。

そのため、事業を行う前に環境配慮計画を策定して生態系への影響を回避・低減する対策を検討することとしており、その検討に必要な現状の動植物の生息状況を把握する「生きもの調査」を実施しています。

今回は酒田市の山谷地区で、改修を予定しているため池の生きもの調査を行いました。

絶滅危惧種のジュズカケやスナヤツメ、準絶滅危惧種のツチガエルなどが確認された一方、外来種のウシガエルの生息も確認されました。

今回の調査では在来種の生息が確認されましたが、閉塞された自然環境のため池では、一度持ち込まれた外来種によって在来種の生息環境が失われることが懸念されます。

今後、調査結果をもとに、地域のみなさんと環境配慮計画を検討していきます。

【取材：庄内PJA すがの】



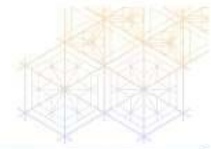
ジュズカケ



スナヤツメ



ウシガエルの幼生



若手技術者の合同現場研修会～庄内橋 橋梁付替え工事～(2024年1月31日)

県の公共工事に関わる技術者は、建設部、産業経済部等に配属されていますが、技術の研さんを図りながら効率的な事業執行に取り組むことが期待されています。

そこで、両部の若手技術者の技術力向上を目的とした合同現場研修会を行いました。

研修場所となった庄内町堤與野の一般県道余目松山線にある庄内橋では、1958年の築造から60年以上が経過して老朽化が著しいことから、県ではバイパス工事に着手して橋梁付替え工事が行われています。

現場では橋脚の鉄筋工事が行われており、その施工状況を間近で見ながら、担当職員による説明を受けました。

当日は43名の若手技術者が参加し、担当者の話に熱心に聞き入るなど、技術力向上への意欲の高さが伺われました。

今後、個々のスキルアップによる事業の効率的・効果的な推進につながっていくことが期待されます。

【取材：庄内PJA 八畝】





七五三掛(しめかけ)地区 地すべり連絡会 (2024年2月7日)

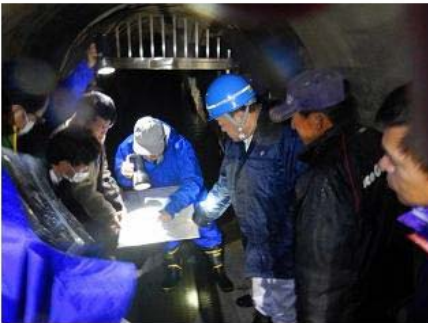
鶴岡市朝日地域の七五三掛(しめかけ)地区では、平成21年の春に大規模な地すべりが発生したことから、地すべりの要因である地下水を下げるための「集水井(しゅうすいせい)」や「排水トンネル」などの工事を、農林水産省が平成30年度まで実施しました。

工事完了後は、施設の管理を行う山形県が、地下水位や土中のひずみの状況などを継続的に観測しています。

「七五三掛地区地すべり連絡会」は、観測データをもとに国の専門家のアドバイスや意見を聞くとともに、行政機関や地域農家の方へ情報を共有する場として毎年1回開催しています。

幸いにも、現時点では地すべりは落ち着いている状況ですが、今後も適正な管理に努めるとともに、観測を継続し関係機関と情報を共有しながら、地域農業が持続的に営まれることを期待しています。

【取材：庄内総合支庁農村計画課 大場】





導水幹線トンネル現場点検 (2024年2月14日)

大町溝土地改良区が管理する、最上川右岸から取水する導水幹線トンネルの内部点検に同行しました。

この導水幹線トンネルは、最上郡戸沢村の草薙(くさなぎ)頭首工から、酒田市成興野の上郷揚水機場まで繋がる5.2キロメートルの水路トンネルです。

点検には土地改良区のほか、東北農政局 西奥羽土地改良調査管理事務所と庄内総合支庁の職員16名が参加し、内部のひび割れや空洞等の有無を確認しました。

完成から50年以上経過したトンネルは、一部にひび割れ等が見られましたが、通水には問題ありませんでした。

春からの取水に向けて、管理者の定期点検は欠かすことのできない重要な取り組みです。

【取材：庄内PJA 阿部】





農業水利施設の維持管理 (2024年2月21日)



三川町にある尾花排水機場で現場研修会を開催しました。

尾花排水機場は、農業用排水路である東郷幹線排水路の末端に位置し、1999～2004年にかけて県営湛水防除事業（小規模）により造成された排水機場で、本施設を経て一級河川赤川水系 大山川に排水しています。

研修には土地改良区と庄内総合支庁の職員8名が参加し、ポンプ設備や電気設備内部の劣化状況等を確認しました。

農業水利施設は、長寿命化とライフサイクルコストの低減を図るために、日常点検や施設の機能診断調査・評価、計画策定、対策工事、データの蓄積からなるストックマネジメントサイクルを繰り返すことで計画的な維持管理を行っています。

今回の調査結果についても、施設の計画的な維持管理に向けてデータの蓄積を行っていきます。

【取材：庄内PJA 阿部】